

# 体育授業における運動理解に関する研究

前田 祐輔 (熊本大学)

## 1. 目的

本研究の目的は、学習指導要領を含めた教師の指導の根拠が不明瞭であることを根本的な問題の所在とし、「小学校体育においては体験を通して理解する知識が重要である」という仮説のもと、現在の小学校体育の実態を把握したうえで体育授業における「わかる」の重要性、そして体育を指導する教師に本来求められるべき運動学に基づく能力を明確にすることである。

## 2. 研究方法

本研究では、  
・学習指導要領や文部科学省の行った調査結果  
・運動理解・指導に必要な「科学」「技術」「戦術」に関する研究が行われている、体育・運動学に関する文献および先行研究等  
を中心に収集・分析し、小学校体育における身体知の重要性と教師に求められる運動学に基づく知識・能力を精選した。

## 3. 結果と考察

1) 児童質問紙・学校質問紙等をもとに分析すると、現在の小学校体育での指導は「コツ」や「ポイント」といった教師の主観的な感覚の伝達が主流になっていることがわかる。ほとんどの運動が科学的に分析されている今、教育現場ではいまだに主観に頼った非科学的な指導が行われていることが明確になった。

また、教師が指導の「根拠」とする学習指導要領は、作成段階におけるワーキンググループでは研究者同士の科学的な審議が行われていた。しかし、その編集の段階で重要な文言が端的、もしくは完全に省略されていた。つまり、学習指導要領における記述の「欠落」こそが、小学校教師が「運動学」の知識を有していないこと、もしくは

その必要性にすら気づいていない可能性の根源であることが明確となった。

2) 体育における「知」は、考えて実践しなければならないという「身体知」の側面と、表現が難しいという「暗黙知の側面を有している。また、運動技術の習得には「わかる」と「できる」のスパイラル的学習が必要であることが複数の先行研究から明確となった。

3) 「コツ」に関して運動学的に分析を行った結果、「自己投企」「単一性」「偶発性」等の性質上、「コツ」は教えられるものではなく自ら導き出すものであることが明確になった。

4) 小学校教師に求められる能力を以下のようにまとめた。  
・「運動経験」に関しては、教師自身が対象の運動を行い、獲得しようと感覚世界における試行錯誤を行うこと。  
・「運動学的意識」に関しては、系統性を理解し、運動を全体像だけではなく局面構造でとらえること。  
・「運動共感能力」に関しては、経験・知識をもとに児童の感覚世界をのぞき込むこと。

## 4. 結論

本研究では、「体育科教育において『わかる』は必要不可欠である」「小学校教師に求められる最低限の能力」が明確になった。

## 5. 主な参考文献

金子明友・朝岡正雄 (1990) 「運動学講義」 p1-p291